PISA IN FOCUS 10

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

子どもが学校で成功するために親は何ができるのか?

- 小学校1年生の時、親と一緒に本をよく読んだ生徒は15歳の時、まれにしか、またはまったく親と一緒に本を読んでいない生徒よりも、PISA2009年調査で顕著に高い得点を示している。
- 小学校低学年時に親が本を読んでくれた生徒は、家族の社会経済的背景に関係なく、成績が良い。
- 15歳の子どもに親が関わっていくことも、PISA調査での良い成績と強い関連がある。

ほとんどの親は本能的に、子どもにより多くの時間をかけること、子どもの教育に積極的にかかわることが、子どもに人生での幸先の良いスタートを与えることになると知っている。しかし、多くの親が仕事と家庭のバランスを取らなければならず、子どもにかける十分な時間があるとは決して思っていない。加えて、親は、自分が子どもの学校での成功を左右するような何らかの能力に欠けているのではないかと感じて、しぶしぶ子どもの宿題を手伝っていることがよくある。

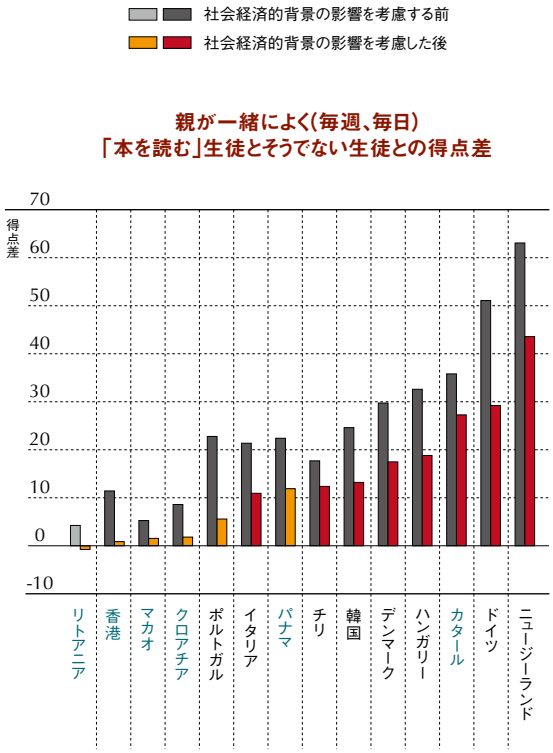
PISA調査のデータ分析によってもたらされた良い知らせとして、親が影響を及ぼすのに博士号も無制限の時間も必要ではないということがあげられる。実際、生徒の読解力の成績をあげることにつながる親子活動の多くが、比較的少ない時間で効果があり、特別な知識も必要ではない。これらの活動で本当に必要なのは、純粋な関心と積極的な関わり合いである。

小さな頃の関わり合いが後に実を結ぶ…

PISA2009年調査では、生徒と校長からのデータを集めるだけでなく、生徒の親にも質問を向けている。これらの質問には、小学校の1年次に親が子どもと行った活動に焦点を当てたものや、PISA調査の時、すなわち子どもが15歳の時に親が子どもとともに関わった活動に注目したものなどがある。

PISA IN FOCUS

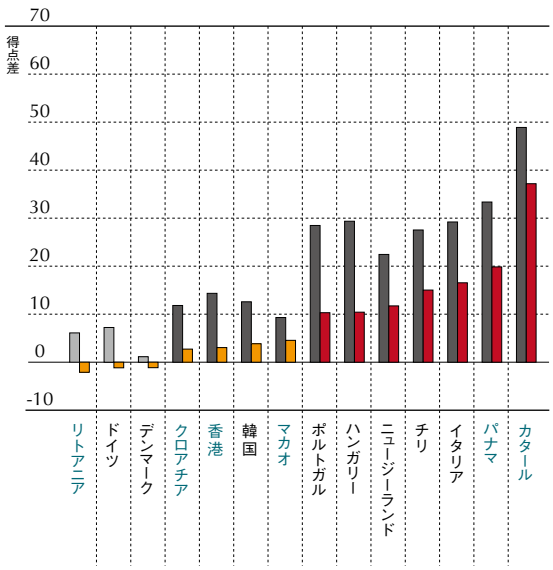
小学校1年次における親のサポート



親の回答からは、小学校1年次における親自身による子どもへの関与と子どもの読書活動とが、15歳時点の読解力の成績に密接に関係していることが示されている。小学校1年次に、子どもと「毎日、ほぼ毎日」または「週に1、2度」本を読んでいたと親が回答した生徒は、子どもと本を読むことが「決してない、ほぼない」または「月に1、2度」だけであると親が回答した生徒よりも、PISA2009年調査の得点が顕著に高くなっている。データが利用できる14か国・地域全体の平均では、その差は25点であり、1学年の半分を優に超える差に相当する。しかし、この差は、非OECD加盟国であるリトアニアの4点からニュージーランドの63点まで幅がある。

…しかも、
家族の社会経済的背景に
関わらずそうなっている。

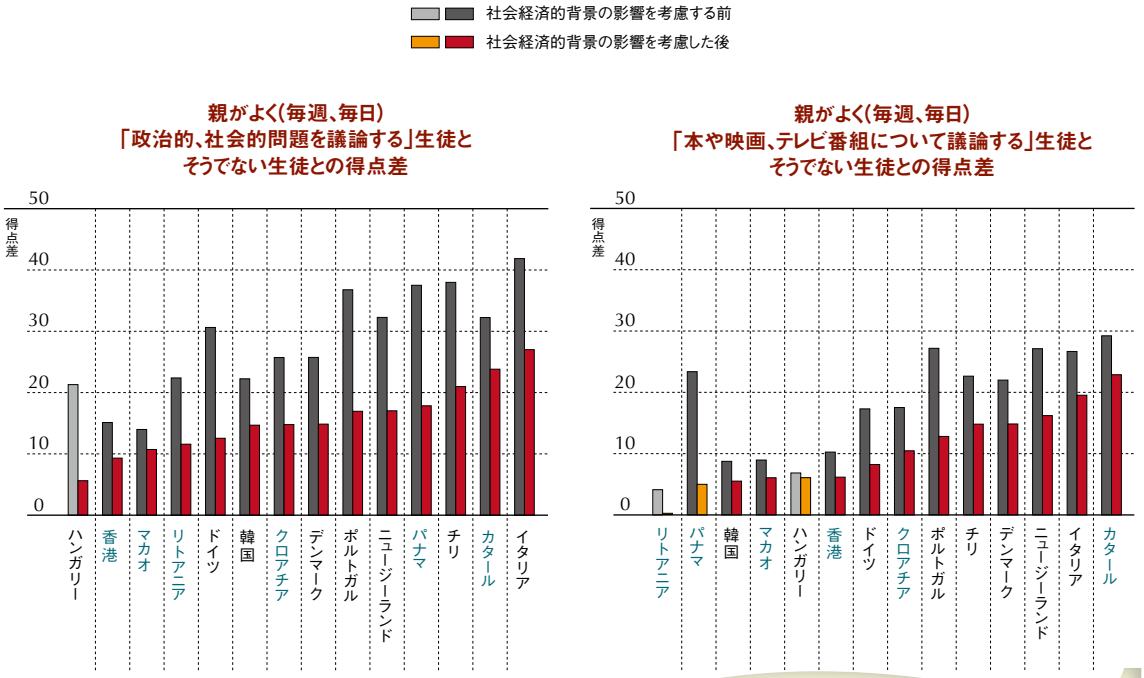
親の関与に関連する得点の差は、部分的には、家庭の社会経済的背景の違いを映し出している。何故なら、平均的には、社会経済的に恵まれた家庭の生徒は、親の関与も含めて、様々な意味で学習の助けとなる環境に恵まれているからである。しかしながら、同じ社会経済的背景の生徒を比較してみると、小学校の1年次に親が定期的に本を読んでくれた生徒は、そうでない生徒よりも平均して14点得点が高いのである。



注: 統計的に有意な値は、濃い色で示す。
国・地域は、社会経済的背景を考慮した後の得点差の小さい順に左から並べている。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Tables II.5.3 and II.5.4.

興味深いことに、親子の活動が違えば、それと読解力の得点との関係も違ったものになっている。例えば、平均して、親の関与に関わる読解力の得点差は、親が子どもと本を読むとき、親がその日の出来事について話し合うとき、親が子どもに物語を話して聞かせるときに最大となり、子どもと文字のおもちゃで遊ぶような時は最小となっている。

生徒が15歳の時の親のサポート



注: 統計的に有意な値は、濃い色で示す。
国・地域は、社会経済的背景を考慮した後の得点差の小さい順に左から並べている。
出典: OECD, *PISA 2009 Database*, Tables II.5.3 and II.5.4.

何歳であっても、親が生徒に関心を持つことは、生徒のためになる。

PISA調査の結果では、15歳時点の親子の活動が、PISA調査における生徒の読解力の得点と強い関連があることも示されている。例えば、親が政治的、社会的問題について生徒と「毎週」か「毎日」話し合う生徒は、平均して、親がこのような問題を「あまり」もしくは「まったく」話し合わない生徒よりも、28点高い得点をあげている。得点の上昇はイタリアで最も高く（42点）、マカオで最も小さくなっている（14点）。社会経済的背景の影響を相殺した場合、得点の違いは少なくなるが、それでもまだ重要であり（16点）、ハンガリーを除く、すべての参加国・地域でその違いが観察される。また、PISA調査の結果によれば、「本や映画、テレビ番組について話し合う」、「子どもの学校での現状を話し合う」、「テーブルを囲んで一緒に夕食を食べる」、「時間をかけて子どもとちょっとした会話をする」といった別の親子の活動も、学校において生徒が読解力で良い得点を取ることと関連している。

結論:すべての親が、子どもとの会話や読書に時間をかけることで、子どもが潜在能力を十分に発揮することを手助けできる。特に子どもが小さいときはなおさらである。教師や学校、教育システムは、忙しい親が学校の内外で子どもの教育により積極的な役割を担えるよう、どのように援助できるのかを探るべきである。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Francesca Borgonovi *(Francesca.Borgonovi@oecd.org)*
出典: *PISA 2009 Results: Overcoming Social Background: Equity in Learning Opportunities and Outcomes* (Volume II)

参考サイト:
www.pisa.oecd.org

次回テーマ:
「学校制度は移民の生徒の増加にどのように対応しているのか?」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。